

昭和三十四年七月二十五日 第三種郵便物認可
（毎月一回、十五日発行）

（通第一三八号）

慈光

第十二卷

第九號

目次

煩惱の所為……………	近角常観……………	(1)
善知識を訪ねて……………	福島政雄……………	(3)
身命を顧みずして……………	信国 淳……………	(8)
心と真実……………	佐藤強三郎……………	(13)
正信偈私解……………	白井成允……………	(21)

煩惱の所為

近 角 常 觀

歎異鈔の第九章に示されたる唯田房の不審と、之に對して聖人の同一悲歎は、実に信後生活に於いてヒシ／＼実験するところの事實じや。若し此章が無かつたならば、確かにハタと行きつまつて了うであらう。往くも死せん、帰るも死せん、止るも亦死せんということは初一念ばかりではない。後念相續に於いても同様じや。何となれば、後念は初一念の繼續反覆たるに過ぎないのじや。

夫につきて根本的に告白せねばならぬ事は、私が「教行信証」を熟読して頂く様になつた動機は、信巻に引用せられたる涅槃經の、阿闍世王入信の文を拝見して大いに驚いたのが抑々の源である。如何にも我胸中の有様が見抜いた様に書いてある。

ついでながら我心を見抜かれるということは、実に信の一念に於いて無意識に仏の御慈悲をいただいた心持じや。否私など御慈悲を話しつつあるとき、聴いて下さる方が自分の心を言いあてられたる心地して、思わず知らず落涙さ

ることがある。そしてまたお慈悲が分らぬという人がある。言い当てられたのが仏の慈悲ではないか、仏かねてしろしめしてとはこの点じや。

私が「教行信証」を見て言い当てられて見れば、実に私は其通りじや。顧みれば自分の煩悶によりて信仰に入りたる経過が、恰もこの文の通りである。そこでこれを「懺悔録」では自己の入信の経歴と並べて紹介して置いた。

併し、今よりふりかえりて見れば、其時驚かされたは寧ろ其時の心中にあまりに共鳴したのであつた。さればその心中に於いて相續しつゝある信の有様を以てさかのぼつて、入信の経過を述べることになつたのであらう。されどたしかにこの涅槃經の文に驚かされたは入信六年後の事實であつて、今考えて見れば、むしろ其の時の私の心中にあまり適切であつたのである。

して見ると信後も、入信の状態の反覆たることを無意識

に手応えのある御言葉である。

に告白したようなものであるが、今この御文を熟読して見るに、成程阿闍世王自身としては、入信の事実にして、既に総序にせよ、又信巻別序にせよ、その積りで御書きなされたことは明らかであるが、信巻終の文は、親鸞聖人としては、信後悲歎の文となつてある。

定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まずというは、踊躍歡喜の心おろそかに候とか、またいそぎ浄土へまいりたき心の候わぬと同意たることは勿論のこと、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑すること

は、実に、煩惱の所為である。よく／＼煩惱の興盛に候にこそとあるは是れである。御一代開書にも、愛欲も名利も皆煩惱なりと仰せられてある。阿闍世王の行爲は実に煩惱の所為である。煩惱の興盛である、罪惡深重、煩惱熾盛である、阿闍世王は我等である。否我等日常の生活が皆阿闍世王である。

かくなれば、我等は一言も出ない、ちよつとも頭が上がらぬ。併し、仏かねてしろしめして、の一句で蘇き上る。復活する。

仏かねてしろしめしてというは、決して唯田房に安慰を与えるべく聖人が出まかせに言われたのではない、たしか

彼の涅槃經の文に「阿闍世王とは即ち煩惱を具足せる者なり」とある。恐らくはこれであらう。前の文に、此法を信する衆生もあり、そしる衆生もあるべしと仏かねて説きおきたまえることなれば、と同一筆法である。

仏かねてしろしめしての一句で、如何に煩惱興盛なのも、如何に疑謗、嘲弄を蒙るも、無言の下に頭の下るのがありがたい。

そこで彼の涅槃經の偈に「世尊大慈悲、衆の為に苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著せられて、狂乱所為多きが如し」とある文である。実に妙な形容である。私はこの形容を見るときは、むしろ自分の所行のことを言われた様な心地がする。そして文章は明らかに仏の御苦勞を仰せられたものじや。そこでツク／＼考へるに、我等が実に鬼魅に著せられて狂乱所為多きが如き有様であるを觀そなわして、仏は一層居たたまらぬ心地して御覽下さる御心じや、五劫思惟の御苦勞というも是である、永劫の修行というも是である。

「如意」の釈に、一には衆生の意の如し、二には弥陀の意の如しとあるが矢張り是である、衆生の意の如く、とい

うは善惡淨穢、種々の境遇、種々の機類、様々である。これに応じて仏はこれを觀そなわして、五眼円かに照し、六通自在にして、機の度すべき者を觀そなわして、種々に善巧方便して御苦勞下さるのである。

今狂亂所為多きが如しというも吾等は煩惱の所為で氣も狂わんばかりである。之を觀そなわす仏は、殊にその狂いつつある様子を見て一層大慈悲の為に氣も狂わんばかりである。よく／＼煩惱の興盛に候にこそ、いそぎ淨土にまいりたき心なきものを殊に憐みたまうなり。「是を以て今、大聖の真説に拠るに難化の三機、難治の三病は、大悲の弘

善知識を訪ねて

善財の求道の物語を申上げて居りまして、この前まいりましてから一年になりますかと思いますが、甘露火王のこゝとを半分ばかりすこし詳しく申上げておりました。その続きを今日はお話し申上げます。

が、今の私共の三時間に当りますかと思うのであります。その嵐のはじめの時に於いて甘露火王はおはげみになる、おつとめになる。そして決して眠りをむさぼるということをやなさらぬ、早起きをなさるのであります。

そして夜が、今の十二時間にあたるのでありますが、その夜のうち二時と云うのでありますから、六時間でありましょう。六時間は静かに安らかに休まれて、夜の第三時に起きられるという。ところがこの夜というのを何時から数えるのか、それを私大分考えて見ました。夜の第三時というのが何時頃になるだろう。大凡そ、午前三時か四時の頃じやなからうかと思ひます。

非常に早起きをされる。そして先ず御自分の心をじつと静かに定められます。まあ禪定というところでありまして。そして法樂とありますから、まことの法を樂しまれる、みのりの樂みを身にうけられるというのでありますからして、心を静めて、御自分を正しい法法の境地にお置きになる。

身心の調整

それからその次に、外は色々の人々の上に思ひを走せられる、一般人民のことを考えられる。この場合に決して、食りとか、眠りとか、そういう心をおこされない。そして嵐の初めの時に、先ず楊子をお使いになる。楊子を嚙むと

誓をたのみ、利他の信海に歸すれば、これを矜哀して治し、斯を憐憫して療したまう」と仰せられたるはこれである。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

昭和七年十一月十一日。涅槃經善巧の句義と
歡喜抄第九章との同意なるを感じ、作有り。

為阿闍世王

不入涅槃章

善巧大聖涙

矜哀無尽蔵

常觀

福島政雄

時間と秩序

甘露火王の国では、一晝夜を八ツの時に分けたというのであります。嵐四時、夜四時というのでありますから、今の私共の時間で考えますと、甘露火王の国の一時間というの

ありますが、つまり口を清らかにされるのであります。そしてお祭りをなさる、祖先のまつりでありましょう。

この甘露火王は人をおさめようという時には、必ずまず自分の身を修められる。先ず自分がおさまつてから、自分の身が、まことの道に落ち着いてからということでありましょう。それから心が和平というのでありますから、心が和いて、たいらかになつて、そうして心が清らかな心持になり、身体もそれに應じて、和いでまいります。そうしてから教化、お教化をなされると、そういう次第で、甘露火王は、今の楊子を嚙むということから始つて、そして御先祖の祠祭をなさる。つまり、まつりをなさるといふのから始まるわけでありまして、所謂まつりと、まつりごとがひと流れになる。御先祖のまつりをして、そのまつりによつて、静められ、和げられたところの心をもつて、政治のことをおこなわれると、こう云う次第になつて居ります。

それから甘露火王が御自分の容儀を整える為の沐浴、お風呂に入られまして、その外、御自分の身体を整えられることを御経では、詳しく述べてあります。それから王におつきの人々も、非常に莊嚴な有様をして、種々の功德、十の功德と云つてありますが、種々な功德を具えているというのでありますからして、つまりおつきの人々も、自分の

姿、形をおごそかにするばかりでなく、自分の心を王と同じように整えるというのでありましょう。

そして特に私の目につくと思ひましたことは、この甘露火王の王宮においては、そのうちで、王宮内で仿いて居りますところの女達、それは若い女というのでなくて、相当に年をとつて、そして徳のある、立派な、つまり、精神の立派な女性、それが王の王宮の内でお仕えするようになってゐる。つまり徳のある老女を用いて居られるというようなことであります。

王の報恩生活

そこで甘露火王は先ずこの道場に入られて、賢人、聖人をうやまうといふことをなさる。そして上は福祐あることを願ひ、そして天下の人民達の生活を潤すといふことを大事なこと、お考えになる。そして一方では御先祖の祠祭をなさつて、その御先祖の御徳に酬いといふ心ですべてのことをなさる。そして人に親に孝行して、親をうやまうようにといふことを教えられる。そしてその冥福があらゆる方面に及ぶようにといふことをお考えになります。

或時は王宮を出て地方をめぐられる。そして地方の人民をよくいたわつて、適当な方法でいたわつて下さる。その先祖の祀祭の時は、一心専念、もう一心になつて、心を専らにして、おまつりになる。恭々しく、すこしの怠りの心

その道の人に王がお聞きになるのであります。そして合掌して深く敬つて、礼拝して政治のことを如何にやつたらいいかといふことをおたずねになるのであります。そしてうやうやしく敬うといふ心、尊み敬うといふ心のある限りをつくされる。それから政治のことをおたずねになる、どういふ政治をすればよい政治になるか、まことの道にかなうか。どういふ政治をすれば、悪い政治で、まことの道に離れるか、そういうことを、よくお聞きになつて、つまり王自身が求道者になつて、政治のことをとり行われる。ことに智慧の深いところの臣、古い時から仕えている臣に、話をなさつて、国の政治がよく行われているのか、悪く行われているのか、という国の政治の得失を、そういう智慧の深い臣下に批評をお求めになる、こう云うことでありますから、非常に求道的な王様であります。

こういう風にして国の中の衆生を安樂にならしめて下さる。そして始終自分から御自身を誡めて、それから一般の多くの人々をお教化なさる、こういうことであります。

四つの職業

そして甘露火王の国には、四つの職業別、階級別なのであります。第一は波羅門種であります。この波羅門種といふのは、多くの口業を修す、となつております。つまりまことの道を求めて、自分のその感じて得たところのまこ

もない。丁度御先祖が目の前に居られる、その御先祖に対するような心持でお祭りをなされる。その御先祖の儀形を心に浮かべ、またその御先祖の教誨を御考へになる。そして涙を出さんばかりに感激をもつて、そのお祭りをなさるというのであります。それだからつまり、遠い過去を思ひ、その徳をうけて、その心持から、御自身を平和の境地に導かれて、そして政治をなさるといふ、仲々立派なやり方なのであります。

それからその国の中で、王をお輔ける臣がある。功があり徳があり、賢い立派な人で、立派なおこないのある者。それから、在家出家の非常に徳も高く、年も相当にたけている人、そういう人を大切になさいます。そしてそういう人が、死んだ場合には、その形容を絵に描いて、その人々をまつところの御廟を建てられ、その絵姿をそこに安置されるというやうなことであります。それだから、つまり、国内の今現に仿ひている者をも、それから、徳があつて、高齢に達して亡くなつた者をも、みなよく敬つて、そういう者の記念をお遺しになると、こういうことになります。

王の政治

それからいよいよ政治の事を行うといふ時には、正しいみのり、正法、正しいみのりの義理を聴聞なさる。それは

との道を、口に説いてきかせるといふことが主なおこないである。それが波羅門種といふのであります。

それから第三は、刹帝利種といふのであります。これは手業、手わざとなつておりますが、種々手をつこうてやるところの職業に従事する。然し考へて見ますとこの刹帝利種は、いくさの事にも関係があるのであります。

それから第三は、吠舍種といふのであります。この大多數は農業にたざわつてゐる。それから第四は、戌達羅種であります。これは驅逐業とありますからして、牛馬などの牧畜をやるのであります。そのほかいろいろ、旃陀羅種などがあります。これはこの悪律儀の業をやるのであります。お経によくこの悪律儀という言葉が出て来ますが、この悪律儀の業といふことをここで云つてあります。これは、これは獸類を屠殺したりすることを自分の仕事にしてゐるのをいふのであります。それは旃陀羅などがやるとなつております。

さあこう分れておりますけれども、これがいずれも大切なものであります。旃陀羅と云へば普通には賤しめられるのであります。銘々が所謂分業で、自分自分の仕事をやつてゐる。そのいずれも無くてならぬ大事なものであります。こつちばかりは尊い、向うは賤しい、そう云う区別

はないようであります。

功德のことそれから功德の問題でありますが、一切に功德になることを修する、一切に功德になることをする。ところがこの、その国の国民の行つたことで功德になつたところが沢山あるうちで、その六分の一は王に属する。皆でやつた功德の六分の一は王様の功德ということになる。それからみんなが悪いことをやつた、不善業をやつた場合にもその六分の一は矢張り、王の罪業ということになると云われてあります。これは心地観經報恩品などを読みまして、つまり国民の功德も、罪業も、それが王に帰する、その何分の一、何分の一とあります。然しこの何分の一というところにあまり拘泥しない方がよいように私は感じて居ります。兎に角、国民が功德を積めば王に帰するし、国民が悪いことをすれば、それも王に帰するということになつていて、王の罪の山、山に譬えますれば、この王様に帰したところの罪の山というものが、非常に高い山になつていて、仲々その山を壊すことが出来ないというような、そういう高い山になる。

それから甘露火王は、それが御自分の問題となるものがありますからして、御自分が福德・智慧のことを御修行になる、ことにその御修行が深く勝れた御修行をなさるといふことを言われてあります。

身命を顧みずして

——歎異抄の講義から——

信 国 淳

おのおの十余ヶ国の境を越えて身命を顧みずして尋ね来たらしめたまう御ころざし、
ひとえに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり。

歎異抄二章。

……「往生極樂の道」は我々が、ただ「問う」というものではない。そんな道を我々がただわけもなく問うなどは、およそ考えられぬことである。にも拘らずそれを敢て問うことがあるとするなら、それは必ず我々が何かによつて問われるからのことに相違ない。

往生極樂の道は、いかにものように、我々が問わされてこそ問う道である。我々がそれを問われるのは、問はせて是非にも「聞」かせねばならぬような答が、我々のいのちの内にすでに用意されていたからであつて、その答を云い当てたのが「往生極樂の道」というものである。

そういう道を用意して、我々のいのちのそも／＼の始めから、我々を忍耐強く待つてゐるのが、我々を生かすいのちのまことなのである。

関東の同行たちが「十余ヶ国の境を越えて」尋ねて来た

重い罪業

ここで一寸、罪業といううちでも、罪の深い罪業ということについて、一言してありますが、この地神、大地を司る神でありますが、この地神が常にこういふことを言っている。自分はこの大地を背負つてゐるし、大山も背負つてゐる。なにかんずく、須弥山も自分は背負うてゐる。そういう重いものを背負つてゐるけれども、それは重いと思わぬ。ところが三つの種類の人というものがこまる。三つの種類の人は自分は背負うてやりたくない。第一には、心に叛逆を抱いて、そして王を殺害しようということを考へてゐる。そういう人間が居ると重くて／＼たまらぬ。第二には恩のある父親母親を捨てて了うて、父母に対して親孝行でないというやうな人間がある。これは重くてたまらぬと。それから第三には、因果ということを無視して仏様その他をそしつて、そしてまことの道を破ると、そういう人間が居ると重くて／＼たまらぬ。この三種類の人間が居ると自分は非常に重く感じて、こんなのはとても背負うてやることが出来ないという感じを自分は起こすということをして、つまりそういう罪というものは非常に重いということとを云われて、それを犯すところの罪というものが王に帰するということになつております。

未完

、その「こころざし」は、外には確かに聖人という強い人格の縁に牽かれてのことであつたが、内には必ずそのやうないのちの秘かな要請があつて、それに促がされた彼等の志願であつたであらう。ともかく彼等はその志願に駆りたてられて、苦しい京への旅を敢行して、直接聖人について往生極樂の道を問ひ聞くのである。

しかしどんな問いにしても、問いそのものがすでに正しい問いであるのでなければ、正しい答というものも亦決して得られぬのではなからうか？今の場合は往生極樂の道を問うのであるが、それを問うのも、やはり問いそのものの正しさが決定的とならぬ限り、いのちの与える回答もまた決して決定的に正しいものとならぬであらう。いのちのまことは、ただそれがまことをもつて問われる時にだけ、まことの言葉により、まことそのものの名告りとして、我々

の聞くことの出来る答になるのである。

ところで我々の往生極樂の道についての問いを、まことの問いとして決定するのは、いつたい何であるだろうか？私はここで聖人が「身命を顧みずして」とさりげなく口にせられたこの一句に、それを決定するものがはつきり示されているのではないかと思う。いのちのまことが我々に必要とする正しい問いは、いつ、どこ、誰の場合であるにせよ、必ず自己の身命を顧みないことをもって問うようなまことの問いでなければならぬのである。

いつたい我々のそれぞれ苦悩を^せ荷負ういのちは、我々自身がそれを顧慮するよりも、むしろ我々の顧慮せぬことによつて、実は却つて苦悩からの解放を得るといふ秘密なからくりを抱えている。というのが、自己を顧慮する我々の心というものを考えてみると、それはまことに排他的で自己中心的で、根つからの利己的な心である。だから我々には苦悩といつても、我々の云う苦悩のすべては、自己のために自己の心が苦しむ苦しみのことであつて、自己に係のないことで我々の苦しむ苦しみのものはないのである。しかるに我々には、自己の苦しむのは決して自己のためではなく、ただ他人のために苦しめられるのだと思へないし、又自己を苦しめる事件なら、何でもみな自分

れ、それがただ一つに結合されるまことのいのちの世界であり、どんないのちにとつても同一な、極樂である世界なのである。

そうしてそうした極樂世界をもつて示すいのちのまことの配慮こそ、とりも直さず、佛をして佛たらしめる仏の御ころであると言われる。そしてみると、我々がその仏意にかなひ、極樂の道を「問い聞く」と、自己の「身命を顧みない」ととの間には、犯し難い内面的、必然的ないのちの繋がりがあつたわけである。聖人の「御物語」のなかから、耳底に留まるところを話したいという歎異鈔は、その繋がりを、簡潔な言葉をもつて、あの通り適確に表現しているのである。

我々の身命を顧みぬ心だけが佛意にはかなつてゐる。それ故、身命を顧みぬという場合にだけ、いのちのまことである佛心が我々に働き、我々を領する。むしろそのまことの働くことと、我々の自己を顧慮せぬこととは、ただ一つだと云わねばならぬ。もし我々に自己を顧慮せぬことをもつて往生の道を問うことが起るならば、その時、問髪をいれず、その問いに、道そのものからの答が答へ返す。つまりここには問いが答を決定し、答が問いを決定し、問いと答が互いに互いを成り立たせる内的な、統一的な生命の躍動

の外にこそあるのであつて、それは何時でも外から来ると決めてしまわずにはいられぬのである。それほどまでに自己を盲愛する心をもつて、自己のためにただ善いこと、楽しいことのみを追求し、同時にそれから心を奪われながら生きているのが我々である。我々のいう苦しみとは、すべてをうした我々の心の所産でないものはない。何しろ他人をひたすら排除する、その心で、ひたすら自己のため善いこと、楽しいことのみを追求するのであるから、我々はやがてまたその心で、常に自己のため悪いことを怖れねばならず、苦しいことを味わねばならぬのだからである。そうとすれば、結局我々を苦しめるのは、自己を顧慮する我々の心以外の何ものでもないということになる。

ところでそういう我々に対し、いのちのまことが仿いて我々のいのちの苦悩を顧慮せずにはおかぬという事実がある。もつともそのまことは、もはや我々が個別の人間を等しくつむ普通のいのちのまことである。我々の苦悩は、実に我々がこのまことを知らず、それに背いて生きることと深い関わりをもつのである。そういうまことが、我々のうちに自己を顧慮せぬ心と呼び醒まし、その心を基点にして、そこから我々に明かそうとするのが往生の道であり、そしてそのまことが世界をつつみ、まこと自身を広く、大きく、且とこしなえに開いている世界が極樂である。極樂は、もろびとのいのちが、もろびと自身から解放さ

があり、そのもたらす問いと答の完全な調和があるのである。そういう調和を我々のうちに示現するもの、それは智慧の念佛といわれる。聖人の仰せのごとく、往生極樂の道は我々に念佛によつて与えられるが、しかしその念佛は智慧のはたらきとしての念佛である。我々の個別的な、それ故に暗いいのちのいとなみを大悲して、深くそれを顧みるのは、佛の智慧の念佛をもつて顧みるのである。顧みるその心、そのいのちは、佛の大悲心、佛の御いのちである。だから我々の往生極樂の道は、仏の大悲心が、我々の暗いいのちのために智慧の念佛をもつて拓き開く道、佛の御いのちがそれ自らを智慧の念佛をもつて明るく、自在に展開する道だといふことができる。そして又そういう大悲の自己展開が、ほかならぬ智慧の念佛をもつて行われるという事実は、往生極樂の道が我々には、我々自身の自覚の道として与えられていることを示している。往生極樂の道は、我々の自覚の道、仏と呼ばれる我々の本来の自己、真実の自己に目覚めるべき道なのである。

いのちのまことが我々人間に対して抱くまことの願い、それは、我々人間を単なる個別の人間として終らさずに、普遍の人間として、即ち佛として完成させたいということである。我々の往生極樂ということも、その願いを実現するため、いのちのまことである大悲心がみずから選り取つ

ている道なのである。そしてそういう道の始終が我々の明らかな自覚になるといふのも、それがひとえに智慧の念佛をもつて照明される道であるからにはかならない。

その智慧は、印度の天親が「遠離我心」の智慧と呼んだ智慧である。それは我々が、我の心を「遠離」するところに成り立つ智慧、人間の自己否定、自己疎外に於いて、自然にそれ自身完成しているところの智慧である。この智慧の否定する我々の我心というものは、天親の言葉に従うと「自身に貪著」するものである。自身に貪著する我の心は、たとい佛を信じてといつても、それはただ自己を立てるために信じてるのである。しかしそれは自己を自己として執ずるために、自己の外に佛を閉め出す心であり、自己ならぬ他者として自己の向うに佛を置き、それに自己を対立させるばかりでなく、佛に関わるのも、自己を顧慮する心をもつて関わるのであり、そしてそのようにして関わる心は、ただ自己のため善いこと、楽しいことのみを追求する心でしかないのである。だからそういう我の心でいかに我々が佛を尊信するといつても、実は自己を立てるためにこそ、佛を信じてるのであるから、そこにはもとより自己と佛との完全な結合などのあり得ようがない。我々が自己に貪著し、そのように自己を顧慮する心で佛を信じて限り、仏もひつきよう、自己と異なる他者のなものであり、そして

いう智慧の信心にとつて佛というのは、本源的ないのちのまことを、極楽という光の世界をもつて完成する信心自身の完成されたすがたのことであり、それを完成する道が念佛である。信心が智慧なら、佛も智慧光であり、その智慧光を極楽によつて完成する成佛の道も、また智慧の念佛なのである。

我々人間は、身命を顧みうる心をもつてしか佛に関わりようのない者である。佛の救いを求めることが我々にあつてはすでに佛を疑い、佛に背く心でしかないのである。換言するなら、我々の救いを求めるそのことが、そのまま真実な救いを阻害している当の事態なのである。

しかるに遠離我心の智慧は、まさにこの事態を捉え、それをそのまま照明することによつて我々の信心になり、我々のため念佛成佛の道を開く。それはすなはち、我々の我心が、身命を顧みるほかにないものであることを如実に知見する以外に、身命を顧みぬ智慧の我々に於て成り立つことはないといふことである。又身命を顧みぬ智慧のみが我々をして真に素直な佛子たらしめ、佛の前に礼拝することを得させるといふことである。そしてそのようにして佛に礼拝する心の前にだけ、いのちのまことである南無阿弥陀佛が、まことそのものの名告りとして、聞こえる声となるのである。

他者のな佛であるなら、すべて偶像というものに過ぎない。我々はそんな偶像を前にして徒らに論議を重ねるのであるならば、ただ空しい利己的な救いをそれから乞い求めているわけである。

ところが遠離我心の智慧は、それも矢張り佛を信じて信心として我々のうちに成り立つけれども、しかしもはや我心を遠離している信心として、当然我々のいかなる我の信心でもないものである。それは我佛を信ずというものでなく、従つて我に異なる佛に我をもつて対立する心ではない。否それはひとり佛といわず、いかなる他なるものにも対立する我の無い心である。それ故それは無欲の心である。自己のため善いことと、楽しいことのみを求めるということの無い心、いかなる個別的な我としても生きることを欲しない心である。そしてまたそれ故に、いかなる他とも矛盾せず、したがつて如何なる個別的な生をもその内に受容できる心であり、むしろ世界全体を包括して、世界と一つの積極的な生を意欲することが、その本来的な在り方であるような心である。信心とは云い条、それは世界のあらゆる生命との完璧な融合を成し遂げている本源的な生命に基礎づけられ、その生命の生命に対するまことの愛から紡ぎ出て、あらゆる世界内存在をそれ自らのうちに摂取しその光をもつて世界を莊嚴しようとする智慧なのである。そう

二〇頁より

今となつて見れば、捨吉に向つて「お前が返礼しない事を長い間恨んで来たが、それは自分が悪かつたのだ、米は本当にやつたのであるから返さんでもよい。それを氣にかけてくれるな」と心から言え、それですむのだ。どうかして、本当に氣楽に、それが言える様になりたいものである。と考へてばかりいる。そこで信哉を訪ねて聞いた。

「私は不実を恨まないのが本当の親切であるときいてもそうなれませんか」と言へば、信哉は

「二人で綱引をすればどうなりますか。行つたり来たり。ころんだり起きたり。時には勝ち、時には負け、相手が綱を放さなければ、死ぬまで勝負はつかぬでしょう。死んでも勝ち負けは定められないのですよ。善兵衛さん。あなた、どうです。生きている内に綱を放しませんか。早く放した方が勝ですよ。棄ですよ」と笑つた。

心と眞実

二 自分は悪人か

信哉がまた村へ帰つたという噂をきいた。行つて見ようか、だが、こわくて仕様がな^{ひとも}い。一瞥で腹の中まで見抜いてしまう。それでも訪ねたいなあ、いやまで、やつぱり行つて見ようと、ようやく思いきつて宿を訪ねた。

信哉は区長の家に泊っているのだ……区長とは町内会長の様な職である……信哉は丁度区長の家に居た。善兵衛は

「あの話を聞いてから困りました。私は二重の悪人です。善人の皮を被つた偽物だつたのです。中味も皮も全部が悪人のくせに」と訴へた。信哉は更に驚かず、いとも嚴肅に、しかも溫情をこめて、

「それが本当のあなたの姿ですこの私もその通りです」と落付いて、一語一語ゆつくりと力強くはつきりと答えた。善兵衛は奥に意外だつた。「信哉もか」と思い、顔をのぞき込んだ。信哉は「これは到来の名物、越後長岡の『越の雪』といううまい菓子です。名物にうまいものなしということもあるが、これは日本の三大名菓と銘打つてあるが、殿様の茶菓子でした」

としきりにすゝめる。善兵衛は「九州に居ても北陸の名菓が食べられる、ありがたい」

あの人でよかつた。然し考えても、どうしてもわけがわからな
い。

信哉を訪ねたら人が来て居た。お茶を二、三杯呑んで、物足りない気持ちで帰つた。

「又お出でなさい」

といつて丁寧に送つてくれた。夜又訪ねたら、宿では今客人はお一人ですよと案内してくれた。善兵衛は、「悪いと分つても良くない者はどうすれば良いのでしょうか」ときり出せば、

「自分が親切をしたつもりで居たのが、本当の親切でなかった、と分つたらどうでした。人が卑しむのが当然でしょう。人が相手にしない様になるのも無理はないと思つたでしよう。捨吉さんを恨んだのは自分が至らぬためであつたと、気が付いたでしよう。その恨む心を止め様としても止まぬとは、自分はいよく／＼だらぬ人間であると思わなかつたですか」

善兵衛は、

「だから、今私は苦しんでいるのです」と答えた。信哉はそばの本を取り出した。

「この本のことを御覧なさい」と指して渡した。

才三 返報を求むる心

そこには

とほめながら食べずに信哉の顔ばかり見て居た。信哉は「私の顔に何か書いてありますか。…偽物也…という正札でしよ
う。それが見えますか」

と真顔でいう。善兵衛はまるで狐にだまされたようである。ようやく一つ食べて帰つた。実にうまい粉菓子である。

家へ帰つて考えたが、何が何やら五里霧中である。自分は悪人と定まれば、居ても立つても居られない。それなのに信哉は悪人が、それとも二重の悪人が、腹の中からの悪人が、どうして、あんなに「正札が見えますか」などと、すまして居られるのであろう。これはどういうわけであらう。信哉は嘘を言わないだらう、そうすれば私と同じ悪人のわけである。人に良くすれば、人から良く迎えられる、人を撲なぐれば、人から撲なぐられる。正真正銘の本真物ほんまものなら貴ばれるが、偽物、メツキとわがれば卑いやしまれる筈はずである。折角本真物として自分も思い込み、人にも思われて来たものがメツキ物であつたと分つたならば、どうであらう。

然し意外な事には、私が心の中を述べた時には少しも驚かず、それがあなたの本当の姿です」といつて、思いもかけぬ親しみのある、なごやかな、察しのある力強い態度であつた。あれが別の人であつたならば、直ちに絶交呼ばわりになつただらう。あゝ、相手が

『人間は喜んで人に親切をやることもあるが、相手が少しも感謝して来ない時には、不平が起きて来る。大きな親切をすれば、するほど、不平も大きくなる。それからだん／＼相手を恨むようになり、憎むようになりいつも／＼相手が癪にさわつて忘れることが出来る、世の中が面白くなく、遂にはこのまゝ死んだら、どこへ行くのかと苦悶するにいたる。』

この様な人間の親切は地獄行きのたねである。勿論悪をなせば、人間の心は苦しむが、然し善といえども、善を為したがために、これを誇り返報を求めて、これによつて喜びを感じ満足しようとするならば、その返報のないときは、いつまでもこれを忘れることが出来ず、死んでもこれを帳消しには出来ぬ氣持になる。これが善、惡ともに表面に現われると否とを問はず、自覺のあるなしを問わず、深く心にしるされて、忘れる事の出来ぬ苦悶の種子となる。

五分五分の相対から出たものならば、善も惡も共に苦しみの種子となる。』
と書いてある。

善兵衛は、これを二、三度繰り返して読み、ムツカシイ顔を上げた時に、信哉は、

「親切は善い事です。親切は大変有難い事です。人間同志はお互に親切を生合つて暮して居るのです。人間には同情する心、親切の心がある。この心があるのが禽獣と違う大事な点でしょう。」

子供は親の親切で成長する。人が溺れて居る者を見れば川へ海へ飛び込んで助けてやる。病人が食う物がなく、薬も買えないときには之に親切をしてやる。急病人は一時を争う。急場をしのげば又復

佐藤強三郎

活する事も出来ることもある。親切は実に尊い事です。人は大いに親切を尽してやるべきです。

然し残念ながら限りがある。助け送る事が出来ない。茲で心しなければならぬ事は、親切をしたために、遂には人を憎む結果になるという事です。そんな恐しい心を自分が持つて居るという事です。その心をどう始末するかが大きな問題です。

或所に面白い人があつた。その人の所へ何か物を持つて行つてやつても「ありがたい」とは云わない。いつも「これはお前のためである」と笑顔で云う。それでも村人は誰も不平を云うものがない、それどころか、われも／＼と、その人の所へ物を贈つては、「これはお前のためである」と聞いて喜んだ。村でも評判になり、熊さんが、八さんにおはぎを持つて行けば、八さんはニツコリ笑つて「これもお前のためである」と、この真似を云つては二人で哈哈大笑するようになったという。その人は布施の心が尊いのだという事を身を以て教えたのでしたが、あなたも一つやつて見ませんか」

と云えば、善兵衛は首をちぢめて、頭を掻いて返事をしない。家へ歸つて「限りがある。限りがある親切」と考え込んだ。

信哉はまた村を出た。そして十日程して歸つて来た。善兵衛は会いに区長の家へ行つた。信哉が云うには、

「善兵衛さん、あなたは金剛石を知つて居るでしょう。金剛石はガラスとは違ふ。どちらも無色透明でよく似ている。然しガラスは石で叩けばひびがはいる、われる。鉄でなぐれば砕ける。薬

かい。すまないがその窓をあけて、氷柱を一つ取つてくれませんか」と頼めば、善兵衛は大きなのを一つ採つて渡した。信哉は囲炉裏のそばにある皿の上に置いた。話しているうちに氷はとけで来た。

「善兵衛さん、この氷どうしてとけるのでしょうか」

と顔を見れば、善兵衛は笑つて

「火の暖かさでとけるのでしょうか」

信哉はそこで

「氷は自分でとける事は出来ないのです。中まで皆冷たく凍つて居るのですから。然し、どんな大きな氷でも、限りなく、絶えざる大きな火に遇えばどうなるでしょう」

善兵衛は、子供に聞くようなやさしい問とばかり言下に

「火の方が大きくて熱が限りなく続けば、勿論氷はとけるでしょう。だが小さい火ならいくらでも氷で消えます」

と信哉の眼を見た。信哉はキチンと座り、眼を据えて、善兵衛を見つめて、

「ガラスで傷つくのはガラスです。氷で消える火は小さい火です。ダイヤモンドはガラスでは傷つきません。太陽はいかなる氷でも消すことは出来ない。絶対に親切な心ならば、いかなる悪心にも決して負けずに親切をやり通すでしょう。そして遂に相手を心服させずんば止まぬでしょう。外がいかにか吹雪に荒れて居ても、この様に室で火に暖まつて居れば、凍えることはない、寒くて震えることもない。

横綱と相撲を取つた場合、いくらかかつて行つても、こちらが

品を注げばとけてくる。

それが若し金剛石であつたらどうなるでしょう。石の方が砕け、鉄が凹み、硫酸にあつてもちつとも変らぬでしょう。それどころか依然として形も色も変らず、益々光り輝くでしょう。こんな貴重な石だから金剛石というのでしょうか。世には変つた物がありますね。ガラスとガラス同志だつたらどうなりましょう。互にぶつかれば、曇つたり、砕けたり、形も變つてしまつて用を為さない様になつてしまふでしょう。そして互に互に憎み合つても、もとの様にはなれないでしょう。ガラス同志は、大きいと云つても、色が有つても無くても、硬くても柔くてもガラスはガラスだけのものです。然し金剛石を砕くガラスは無い。

ガラスの親切はガラスで傷いたり、砕けたりするが、金剛石の親切はガラスでは砕けない。

一通りの親切、人間の親切ならば、人間の不実、不平、恩知らずの心に会えば砕けてしまひ、まう親切を続けることが出来なくなるところが、金剛石の親切ならば、どこまでも親切を続けて行くでしょう。これは譬えですが」

と信哉は結んだ。善兵衛は家へ歸つて考えた「砕ける親切、砕けない親切」繰り返し／＼幾日も考えた。まだ信哉が滞在していると、

「ダイヤモンド問答は、わかる様で、わからぬ様で困りますが、……」

と聞きはじめた。信哉は

「今日は雪ですね。外は凍つて寒い、室の中は火があるから暖

負けて居れば、しまひにはその力にあぎれてしまふでしょう。これは向うの力があまり強過ぎるからです。

善兵衛さんの親切は、捨吉さんの不実にあえば、もう続けられない。そして冷やかな心になつて、ついには捨吉を憎むようになった。

それは善兵衛さん、あなたの親切が、不実に負けたのだ。それは冷やかになつた氷と同様です。それが自分でとけられましたか。これからとけられますか」

二人はお茶も吞まずに黙つて居る。

「今度は善兵衛さんの不実、また人の親切を砕くでしょう。かくて次ぎ／＼と憎しみの輪を擧げて行くのです。然し、本当の親切ならば決して砕けぬ筈です。どこまでも親切を続けて行くはずで、そうでなくては、本当の親切とはいわれぬでしょう。よく聞いて下さい。考えて見て下さい」

善兵衛は考えてもよく解らぬ。只こんな冷やかな心で人に向えば、人は逃げだすだろう。そして呆れて親しまないだろう。実に困つた事になつたと思つた。帰ろうとすれば信哉は、

「まだよいでしょう。遊んで行きなさい。逃げ出して荷物腹にしつかり着けてあるから、どこへ逃げてても駄目でしょう」と、まるで千里眼のようだ。

信哉は「わしも困りましたよ。荷物が邪魔で、邪魔で……」とつぶやいた。そして、

「遠慮はいらぬ名物を食べなさい」

と勧めるので、二人してみんな食べてしまつた。また何時でもお出で下さいと、ニコ／＼して送つてくれた。

善兵衛は帰り途に捨吉に会った。お互にチヨツと挨拶して別れた。

捨吉が役場へ行った時、区長に届けてくれといつて、一束の書類を頼まれた。それを持つて区長の家へ行ったら、あがれ／＼としきりに勧めるので、地下足袋を脱ぎ、手拭で足をたたいて畳の室へあがつた。

「お宅には旅の人が泊つて居るそうじやないか」

「うん、泊つて居るが、始終、あちこちと出歩いているのです。今はさいわい居るからどうだ、お茶でも一緒に呑みませんか。そうしなさい」

と区長がすゝめるのにまかせて、信哉の居る座敷へ行つた。区長は、

「これは、村の捨吉さんです。役場の用で丁度来たものだから……」

と引合せて、室を出た。捨吉は恥かしそうに、ろくに挨拶も出来ず、ちよつと頭を下けて、黙つて居る。信哉が

「私は捨吉さんを知っています」

と云うと、突然捨吉は大きな声で

「ハッ何です。私を知っているのですか。どうして」

と云うなり穴のあく程顔を見つめた。

「奇縁ですね。色々な人とお会いする。善兵衛さんから聞いたのです。さあ、どうぞ足を崩して楽に居て下さい」

と、靴の中から洋酒の瓶をとり出し、金の蓋に酒をつぎ

のに驚いた。角の先から計れば四尺位もあるだろう。

「これを捕るには冬でも裸体で海へ入るのです。岸に火を焚いて、暖まつては海に入ります。昔九州の人が、わざ／＼江戸の福沢諭吉先生の所へ土産にしたものです」

と区長は説明してくれた。

捨吉は、あの客人は、気の置けない、面白い、なつかしい人だと思つた。自分の様な無学な卑しい者を、あんなに隔てもなく、見下げた様子もなく、親切にもてなしてくれ、あんな高価なアメリカの洋酒を惜気もなく、呑め／＼とすすめてくれるなど、ほんとに思いもかけぬ事である、とよろこんだ。あの客人はどんな話をするのだろう、一度も聞いた事がない、この間は、酒ばかりお互に呑んでいて、何も話らしい話はせずに酔つて帰つてしまつた。善兵衛は何時でも行くそうだが……

才四 真 仮 問 答

善兵衛はまた区長や客人と話をしていた。

「先日、捨吉さんにこの室で会いました」

と信哉が言へば、善兵衛は氣をもんで、

「そうですか、どうでした。私の事を何か言っていますんでしたか」

「それが碌に話もせず、呑んで赤くなつて帰つた。あなたの事など何も話しませんでした」

今日は捨吉さんと呼んで、一緒に話そうじやありませんか。捨吉さんも話をききたがつて居るそうです。休みですから、家に居

「これは友人がアメリカから持つて来てくれたのです。洋酒はどうですかいけませんか。日本酒より強いですよ」

とおいしそうに呑んだ。

「さあもう一杯」

とすゝめて、二人で交る／＼杯を空けた。そこへ区長が這入つて来た。捨吉は帰るといふ。

「もう少しよいでしょう」

ともてなすが、捨吉は顔を赤くしてもじ／＼しているの、それならば、といつて三人共立つた。入口で捨吉と別れる時、

「また何時でもお出でなさい」

と信哉は丁寧にお辞儀をした。

捨吉は翌日道で区長に会つた。

「お前の所に居る客人は坊さんか」

ときいた。

「いや、俗人だよ」

「そうか柿は好きか。蝦は食べるか」

というから、区長は

「両方とも大好きだ」

と聞かせた。その夕方捨吉は区長の家を訪ねて、籠に柿を沢山と大きな蝦を一匹持つて来て、これを客人にあげてくれと、逃げるように、云いすてて会わずに帰つてしまつた。客人はそれを聞いて、

「そうでしょうな」

と笑へば、区長は怪訝な顔をして見上げた。信哉は、蝦の大きい

るでしょう。区長さんどうでしょう」

と云へば、区長は大賛成で迎えにやつた。捨吉はすぐに来た。信哉は先日の贈物の礼を言つた。しばらくの話の末に、善兵衛は急に改まつて、

「先日、あなたは、わしにも偽物也と云う正札がついて居るといわれたが、あなたは偽物ですか」

と云いに／＼に問うた。すると信哉は言下に、

「そうです偽物です。善人のメツキをした偽物です。善兵衛さんはこの間から、私にそれが聞きたくて仕様がなかつたのでしよう」と云つて、お茶を呑み、外を見た。二人とも無言。

信哉は真面目になつた。又例の様に目が光つて来た。

「自分も恥かし乍ら、親切が好きでした。親切をやるうと心がけて来て、遂に困りました。世の中に親切者ほど馬鹿を見る者はない。相手は平気で居る、それを見れば見るほど癪にさわる。そしてこんなことでは世は闇ではないか、馬鹿々々しい。

自分はそれでよいとしても、世間をどうするのか、と、人を恨み、世を呪うて来ました。その時に、あるお方から次の様な話をききました。その話とは斯うです。

そのお方は

「私はある公益事業を計画して、友人数名と相談して始めました。最初着手するまえ、お互に虚心に提携して、どこまでもやり通すことを堅く約束しました。仇が、途中で、意見も熱意も違つて来

て、一人去り、二人去りして、最後には私一人になつてしまつた。そこで私は友人の不真面目、不親切にあきれた。あの人は、何だ、ひどいじゃないか。自分を置き去りにして行つてしまつた、と。

それからは明けても暮れても不平に思うばかり。遂には仕事も手につかぬ。自分は真実であり、正義である。然るに友人は不実、不正であると、自分の心で定めて友人を恨んだ。

そこで、吾にかえつて考えて見ると、これは甚だおかしい事である。公益事業を始めたものが、それが良く出来ないからとて相手を恨むとは、そんな心で何が出来るものか。殊に自分が善で、人が悪とは、独善も甚だしい、と気が付けば、ほんとに腰が砕けて来た。自分は立派なつもりでやつて来たのであるが、それが名利のためであつたのです。」

と言われました。」

ここで信哉は言葉を切つて、静かにお茶をのんだ。そして

「其時は、誠にありがたかつた。又驚いた」

とつけ加えた。善兵衛は固唾を呑んできいていたが、

「どうしてそれが名利のためであるとわかつたのでしょうか」

ときいた。信哉は説明して

「自分が他人に認められないことを、なげいて、人を恨むとは名誉を望むからである。又人が自分に叛いたからとて、そのひとを憎むとは、本当の親切がないからです。これは利慾のためで、打算的なのです。ここで驚きました。」

初めから自分が悪いと思つて居るならば、まだ簡単ですが、私

本当の親切というものであるならば、相手が、どんなに不実、不親切に向つて来ても、それをどこまでも見捨てず、呆れず、親切にしとおしてくれるものであらう。そうでないでしょうか」と収めた。表彰の話が出たので、善兵衛さんと分家の伴は互に顔を見合せた。分家の伴は、一人心の中に、表彰の前祝をやるうというのに、本家が渡つて来なかつたのは、こんな話をきいていたためか、と思つた。しばらくして、皆は「又聞かせて下さい」と一同席を立つた。

捨吉は翌朝早速訪ねて来た。

「人から親切を受けても感謝が続かず、その恩人が自分の悪口を言つたからとて怒つて、見るのもいやになり、ついに口もきかぬ様にするのは、やつぱり自分が悪いのでしようか」ときけば「それは悪いのです。本当に悪いのです」とキツパリ答えた。

「昨夜帰つてから、自分が悪いのだとは思つたが、それじゃ、やつぱり私が悪いのですね。そうすれば私はどうすればよいのでしょうか」と捨吉はきき返した。信哉は「それならば相手に心から感謝したら良いでしよう。いくら相手が悪口を言おうが、つれなく当らうが、どこまでも心から感謝したら良いでしよう」と眼を据えて見た。そこで捨吉は、

「私も時々悪いと思ひ、感謝しようとしても、どうしてもそう出来ないのです。心が思う様にならないのです。それで実は長い間、こんな心を直そう、隔てまいと色々やつて見ましたが、どうしてもそう出来なかつたのです。気が悪いものですね。御存じか知れませんが、私は昔、家内が病気で困つた時、善兵衛さん

は自分は善である、親切であると思つてやつて居たのです。それがよく考えて見れば、善人の皮を被つて自分を欺いて来た悪人なのでした。兵法の極意に——敵を欺かんとすれば、先ず味方を欺け——とか。私は自分の悪心に自ら欺かれて居たのでした。善人のメツキをした悪人だつたのです。」

と信哉は感慨無量の顔をして一服した。そしてまたしずかに／＼お茶を飲んで黙した。善兵衛は、そうか、信哉さんも親切で苦しんだのか、と心の中でうなずいた。

又捨吉は「一々、御もつとも／＼と素直にこれを受入れた。そして初めて口を開いて、「この話は、それでおしまいですか」と聞いた。信哉は居住いを直して

「これからが大事なのです」

と捨吉の顔を見た。主人の区長は、ただ黙つて問答を聞いて居た。区長の伴は、時々来てはお茶を出し乍ら聞いていた。そこへ善兵衛に用があるとして、分家の伴が来て呼び出して行つた。善兵衛は用をきき、「その話は明日に延ばす。お前も聞け」と云つて、分家の伴をつれて又室へ戻つて来た。皆は何を云い出すかと信哉を見ている。

「人に親切をしても、相手が感謝しないからとて、それを恨み、憎むというのは、本当の親切でない証拠です。然るに、人は之を善人として表彰する。一旦自分が悪いと気が付けば、表彰されればされる程苦しくなる、恥かしくなる。一体自分の悪心をどうすればよいだらう、と思案にくれるばかり。」

そこで、もう一步進んで考えて見ましよう。

から、米を壹俵恵んで貰いホントに助かりました。それから御礼を返そうと思つて居ました。ところが或日、善兵衛さんが隣家の人に『捨吉は恩知らずだ、太い奴だ』と大変怒つて、わざ／＼聞かせに行つたときいた時から、腹が立つて／＼仕様がなない。その後、豊作の時もあつたから、返そうと思へば返されたのですが良く考えて見れば、こんなに腹を立て、居て、それで米を壹俵返したところが、それは怒りに染つた赤い米です。全く赤い米です。

自分はどうかして、この怒る心をやめ、和やかな心になつてから本当の白い米を持つて行き、心からお礼を云いたいと今日まで苦勞して来ました。ところが、心が思う様に言う事をきいてくれません。つい／＼八、九年も経つて了いた。私は死ぬまでに、赤い米でなく、白い米を持つて御礼に行きたいと思うが、それも出来ずに死んで了うのかと思へば、まことに淋しい一生です。恩を受けて苦しむとは、私は本当に馬鹿な奴です」と涙ぐんだ。信哉は、

「それは本当の話です。その苦しみは一生止みませんよ」と口をキリツと結んで捨吉を見た。捨吉はその眼を見るなり、心臓を鉄砲で打たれた様に、度肝を抜かれ、思はず「それは大変だ、どうすれば良いのでしよう」と叫べば「恩を受けて苦しむ。恩を施して苦しむ。一生を苦しんで終るでしよう。只恩愛を解脱せしむる真実を聞くばかりです」と信哉はゆつくりと答えた。

話變つて善兵衛は、信哉の話を聞いてから、いろ／＼と自分の事を思案した。本当の親切とは、捨吉の無礼を悪く思はず、恨まない事である。然しそうと気が付いても、仲々それが出来ない。

正信偈私解 (十八)

白井成允

帰敬序

「帰命無量寿如来 南無不可思議光」

仏恩を知らしめられて慶び、師恩を思わしめられて歎ずる、その心を偈の形に言い表わそうとして、祖聖は六十行百二十句の正信念仏偈を作りたまうた。其の最初に此の二句一行を置く。是れ祖聖の信心の告白であり、以下の百十八句の流れ出る源である。

然るに此の二句は、其の体、「南無阿弥陀仏」の尊号の讃歎に他ならない。祖聖の信心が尊号の徳の流出に他ならないからである。「南無阿弥陀仏」とはもと阿弥陀仏に南無するの義、阿弥陀仏とは *Amitayus-buddha* 及び *Amitabha-buddha* の二義の二辭に顯わされたもの、其の南無の語が添うて *Namo-Amita-Buddha* と成りたまうた。ナモは帰命、アミタは無量、ユスは寿命、ブハは光明、ブッドハ（仏陀）は覺者の義、即ち是れ「量ることのできない寿命と光明とを成り具えたる覺者にたよりたてまつる」という徳の顯われたる名辭である。然るに、寿命は慈悲の徳の・光

今この帰敬序を誦して私の思いをしるす。

諸の法は縁によりて生ずると言われる。法とはモノ又はノリの義、すべて存在する事物をいい、事物に具そなわれる法則をいう。存在する事物は或る相すがたを具えているが、其はすべて縁によりて生じ成り、その縁が異なれば従つて異なり、縁が尽きれば相も従つて滅び失せる。この縁生の法則は一切の存在に通ずるので何物も之に由らずして在るものはない。縁は即ち業である、ハタラクである、或は業力である。諸の業縁の力が寄りあい結びおうて或る事を起こし或る物を在らしめる。かく諸の存在すべて諸の業縁力の結び成るところであるが、中に就いて、如何なる業縁が如何に結び合うかに従つて各の存在の特殊の相すがたがあらわれるので、其の如き特殊の相を現わしめる主導力となる業縁を特に因と称する。例えば、米の種が因力となり、土水光熱空氣乃至人力等が縁となりて、米の果が実るが如くである。但し因力も縁力の一なるが故に、諸法從縁生しよふはつてんしようと言われるのである。

之によりて茲こゝに一には、あらゆる存在皆悉く諸の業縁の生ずる所であつて、一として他に縁らざるもの無きこと、二には、各の存在が如何なる他を縁とするかは各自の業因力によりて決定するのであること、三には、各の存在はす

明は智慧の徳の象徴であるから、此の名辭は即ち「量ることのできない慈悲と智慧との徳をまどかに成り具えたまえる覺者にたよりたてまつる」の義の具体化である。其故に、今偈の首に「無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる」と告げられたのは、即ち、「南無阿弥陀仏」の尊号をいただきつつ、其に含まれたる慈悲の寿命と智慧の光明との・思い議り得ず・限り量りを越えたる・如来の徳を被むり味わい、之を二句に開いて自らの信心を告白したまうたのである。

因みに、「如来」とは從如来生の義、即ち、その本不生不滅なる真如の境から、生滅に悩む衆生を化して本の真如の境に度り入らしめんが為に、親しく衆生の迷界に來たり生まれたる者の義である。この義、後に更に詳しく窺いたいと思うが、今は是れ仏陀の異稱と言うに止める。

それで私は此の二句一行を次の六句に意訳した。
「量り無きおほみいのちよ、おん恵み尽きぬみほとけ。
思ひ得ぬおほみひかりよ、おん覺り奇しきみほとけ。
おんみにぞわれらひたすら依りまつり歸りまつらふ。」

べて因縁に従う現象であり、其の体は空であること、が思われる。

此の真理はあらゆる事と物との存在に普く通じて行われる。但た之を意識し自覺するのは人間のみにである。人間は、單なる自然界に住することから超えて、必然に意識界に住する、而もこの必然の事を自覺するに至りて茲に理想界に住すべき当然をおぼえる。乃ち意識の作用の中に理想界と自然界とを位置つけるところに人間特有の葛藤が生ずる。

先ず、人間の存在に於いて、他に縁することは必然である。私共一人々々の身が、本来、父母祖先に縁り、米麦菜魚に縁り、空氣日光水火に縁り、乃至、宇宙一切の存在に縁りて、始めて此の如くに在り得るのであるし、更に各の心には、之を意識すると否とに係わらず、内に世界歴史をおさめている。是れ人間存在の必然である。この必然を己れの存在の深みに認めて、己れの心身一切の諸縁を十分に生かしてゆくところに、自覺の能ある人間の当然の生き方がある。

この互いに他に縁りて生きるという必然を根柢として之を自覺の中におさめたとのえようとする作用の中に人倫が現われる。即ち例えば五倫五常と言ひ、或は人權の尊重という如き是れであるが、そこに君臣・父子・夫婦・兄弟・

朋友互いに相縁る常の倫（すじみち）の当然が知られると共に、人權というも、個人々々相互に縁る關係を認めなければ、人權の在る所以も十分にはわからないであろう。すべての人々が相縁りて社會を成す、その構成の自覚者即ち主であるべき者として各人にいわゆる人格の基本的權利が認められるのである。

人間存在の根柢にひそむこの事理は極めて明らかであるが、人間の善き生活というも、此の事理に従いて互に相縁ること正しきに於いて行なわれるので、若し相縁ること正しからざれば、生活が直きを得ず、曲り覆えらざるを得なくなる。而してこの縁ることの自覚に於いて依ることが現われる。依るとは頼るのである。父子相頼り夫婦相頼る。是れ相縁ることの意識された相であり、随つて心の自然の歩みであるが、然し相頼ること正しきを得ざれば、相互に自他の生を傷つけあい痛ましめあうこと計り得ざるに陥らう。過ぎたる依頼心が自己の心身の力を銷し他の其を碍けるは常に見る如くである。

然らば相頼ること正しきを得るとは如何にして能くし得ようか。答えて言う、縁生の真理に順いてである、即ち自の心身を空じてである。然しこの事如何にして能くし得ようか。

思うに、すべて個体は是れ全体の實現である。例えば、

が感ぜられる。怒み怒り侮り慢り憚り猜み等にその時々縁に應じて限りなく起こつてくる諸の煩惱が不斷に南無阿弥陀仏のおんよびごえに呼び醒まされて己れの煩惱を空すると同時に直に転じて如来の願海の中に融け入らしめられる。無明なる我の執着に因りて万法を迷界造作の縁と化さずにはおらない私の妄業が、其の一々の動きに應じて一一附き添いて離れたまわぬ南無阿弥陀仏のおもいでに摂め取られ、如来の徳化の中に生きしめられる。

釈迦牟尼曾て敬い頼ること無き生をさびしいと見、三世諸仏の法を敬い頼りて生きようと仰せられた。そして八十年の生涯の終に近づきたまうた頃、阿弥陀仏を頼り敬う浄土の教法を顕わし示したまうた。南無阿弥陀仏は釈迦牟尼によりて私共に遺し伝えられた究竟の法であり、人間の頼り敬い得る真実無上の処である。

言わく、「名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう。名を称するは則ち是れ最勝真妙の正業なり、正業は則ち是念仏なり、念仏は則ち是れ南無阿弥陀仏なり……」（行巻）

南無阿弥陀仏は衆生の一切の無明を破る。私共の身と口と意との三業に為すところ本は無明の根源から出でざるものなきが故に、総べて虚仮なり不実なり、そらごと・たわごととなり、真実あること無きなり、その虚仮不実の故に

太郎も花子も各等しく日本民族の實現或は具体化として本から平等一如の性を与える、然し同時に太郎は太郎たり花子は花子たる特殊差別の相を現わす。其の差別の特殊の相いよいよ厳そかなるところに一如全体の性がますます豊かに、實現される。是れ法界の真理であるから、この真理の自覚に於いて生きることが人としての当然の生き方であること明らかである。然るに既に太郎たり花子たる個人となると乍ちその個人我に囚われて全体から隔離し、全体に背反し、全体の作用を障碍する業をなすの傾向を来たし性癖を生ずる。即ち単に縁生の相にすぎざる我に執し法に着して之を實體となす虚妄のみに繋がつつ迷界を造りて止まない。我の皮相の生を主とし其の欲の満足の為に他を手段として用うところ、瞋恚・愚痴・驕慢・詭譎・嫉妬・懈怠・無慚無愧等諸の煩惱罪濁が競い起こりて其の窮まりを知らない。是れ縁生の義に背きて、依ること我執に本づくからである。

然るに、依り頼ること我執の無明に本づくことを縁として却りて其の力を転じて之をして縁生の真理に本づかしめるもの、是れ即ち今の相聖の帰命の一心であられる。云う意は、「帰命無量寿如来・南無不可思議光」——「南無阿弥陀仏」が私の心に憶い起こされるとき、煩惱の自己が照らし出だされ、同時にこの煩惱の私をみそなわす如来の悲涙

世々生々に苦悩し流転するを哀れみましめて、必ず救うと誓いたたせたまいし誓願力によりて、今現在に、私共に起こる一切の煩惱の惑いの業を、その起こる毎に即ち其を惑業と告げ知らせ破り去り、其を転じて菩提の資糧と成らしめたまう、菩提は衆生の一切の当然真実の志願の満足する処である。私共の依り頼る処正しきを得ざれば、私共は無明の惑業に沈没し苦悩海に流転するより他無いのであるが、南無阿弥陀仏に依り頼む信の一念は能く私共を救いて菩提正覺の道を歩ましめる。何という幸慶ぞ、人間界に生れて偶々南無阿弥陀仏に会いまいらせ得たること。尚、寿命の無量は如来の慈悲の永遠無窮極なるを顕わし、光明の無量は如来の智慧の十方に普通無際限なるを顕わす。之について省みるべき点多きも、後に譲る。

（八月六日原爆記念日、願教精舎雨田室にて）

訂正 六号十七頁下段第一・二行

「信を獲て ほとけに まみえ、
敬いて ふかく 慶ぶ、」

編集後記

きびしい暑さも秋風に消されて、爽涼の秋が参りました。天地一杯、草木もみものつて行きます。人も亦みのりの秋を迎えたこととあります。

昨秋自照舎に足利浄円老師をおたずねし、その時御無心申しました善財童子の画と讃の幅が立派に装束されて老師の亡くなられた六・七日の忌日に頂きました。老師とは文字通りの一期一会の御縁でありましたが、老師の八十年の御生涯を通じての求道不止の眞精神をたまわる心地して、日々掲げて、朝に夕に、無限の督励と、無量の安慰をうけて居ります。まことにきびしい、そして、ありがたい教を頂きました。

△福島先生の善財童子の求道の御講話は昨年の台風禍でお出で頂けなかつた為ししばらく休載、御心配おかけいたしました。が、順次、求道の旅を頂くことであります。

菩提樹下に成道遊された釈尊は、完成してじつと落着いて了われたのでなく、心眼が開かれるや否や「見る物、聞く物、触れるものの上に、濃潤たる求道の姿があらわれ、それがそのまゝ、一切人の救済の光明となつていくことがうかがわれます。成道は求道の始まり、眞の求道は成道の光に照らされて可能である。こうしたことを心に浮べつつ、善財の求道魂を聞かせて頂くこと

であります。

△白井先生の正信偈私解は酷暑について御掃部の旅の中で御書き頂きました。昨年夏は、台風のために汽車が一時不通となりまして、先風の御講話が頂き得ませんでした。が、今年は、百度に近い日本一の暑さの名古屋で、一夜、「凡夫の歩み」という題で御縁を頂きました。

想えば終戦の直後、焼土の名古屋で、僅かに焼け残つた西本願寺別院の幼稚園で、大混乱の中に打ち沈む国状下にあつて、大法を讃仰して頂きました。その時、教育者の〇〇さんが

「日本はどうなりましようか。教育の方向も見失いました」と云う問に対し

「日本が今後どうなりましようとも、聖徳太子の教があります。法然、親鸞の両聖の教が残っています。この教のある限り、闇が深ければ深い程星月のひかりが輝きを増す如くに、必ずあらわれて来ましよう。私はそれを信じて居ります」と答えられたのを今更に想い出されました。

△信国様の身命を顧みずしての原稿は、専修学院発行の冊子から頂きました。池山先生が歎異抄の二章のところで「教聞をくには、どうしてもそうならなくてはならない状態、！」と仰言つた心を詳しく知らされました。

△佐藤様の原稿は8ポにいたしました。編集の都合で、老眼の方々には不便をおかけ

いたしますが御海容下さい。

「先日の御書信に自分の様に、いつまでも、煩悩のやまぬものをあわれんで、どこまでも、お呆れ下さらぬ御慈悲」を仰いで、生きられるだけ生きましよう。ドコノまでもです。すからね。無碍、不可思議です。すからね。とありました。

御案内

毎月第一、二、三日曜午後一時半、日曜例会。一国会館。市電、新郊通二丁目下車、東一丁半。
毎月廿四日、午前、午后。昭和区小椋町教西寺、法話会。市電御器所下車。

定価 一部 二十円(送共)

半年 百二十円(送共)
一年 二百四十円(送共)

名古屋市南区新上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市中千種区千種町馬走三八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区新上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番